名簿No. 1

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	瓶裏梅花	東韻

句	起句	承句	転句	結句
	一	翠	室	但
●	●	●	●	●
	枝	袖	内	将
○	○	●	●	○
	清	佳	忽	懐
○	○	○	○	○
	浅	人	知	抱
●	●	○	○	○
	在	花	香	醉
●	●	○	○	●
	瓶	影	馥	春
○	○	●	●	○
	中	紅	郁	風
◎	◎	◎	●	◎

平仄式	平起式
作詩日	令和四年二月二十八日
名前	牛山 知彦

読み下し文

瓶裏梅花

一枝 清浅 瓶中に在(あ)り
翠袖(すいしゅう)の佳人 花影紅なり
室内 忽(たちま)ち 香馥郁なるを知(し)り
但だ将に 懐抱す 春風に醉(よ)うを

語註・典故・作詩メモ

その他のメモ

「室内」は詩的でなない印象もあるが、意外と用例も多いので採用した。

名簿No. 2

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	平起式
作詩日	令和四年三月
名前	字野次郎

詩題	起句	承句	転句	結句
瓶裏梅花	幽香馥郁好風吹	院落梅花是玉姿	剪取移瓶兩三朶	蓬庵春色漫題詩
支韻	◎	◎	●	◎

読み下し文

瓶裏（ビンリ）の梅花（バイカ）

幽香（ユウコウ）馥郁（フクイク）好風（コウフウ）吹（フ）く

院落（インラク）の梅花（バイカ）是（コ）れ玉姿（ギョクシ）

剪取（センシュ）して瓶（ビン）に移（ウツ）す　両三朶（リョウサンダ）

蓬庵（ホウアン）の春色（シュンショク）のもと漫（ソゾ）ろに詩（シ）を題（ダイ）す

課題詩

語註・典故・作詩メモ

その他のメモ

2021.07.19 第1.5版

名簿No. 3

詩題	起句	承句	転句	結句
瓶裏梅花	瓶○	我●	馥●	讀●
	梅○	已●	郁●	書○
	一●	賞●	幽○	窓○
	朶●	花○	香○	裏●
	動●	求○	還○	暗●
真韻	吟○	句●	有●	生○
	神	人◎	韻●	春

（七言絶句）

平仄式	作詩日	名前
	令四・三・提出	岡嶋 宣昭

瓶裏の梅花

瓶梅 一朶 吟神を動かし

我已に 花を賞し 句を求めるの人

馥郁 幽香 還た韻有り

読書の窓裏 暗に春を生ず

da

その他のメモ

名簿No. 4

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	瓶裏梅花	支韻
起句	曇天窓外雪霜姿	○○○●●○◎
承句	二月芳庭花發遅	●●○○○●◎
転句	瓶裏早梅香馥郁	○●○○○●●
結句	迎君開宴夢春時	○○○●○○◎

平仄式	平起式
作詩日	令和四年一月
名前	高橋 幸雄

語註・典故・作詩メモ

二月の庭は雪が残り、花もまだ開花しないなかで、咲いた梅の花を花瓶に活けて、一足早い春を満喫する気持ちを詩にしました。

読み下し文

瓶裏の梅花

曇天の窓外雪霜の姿

二月の芳庭　花発の遅し

瓶裏の早梅香馥郁たる

君を迎え宴を開き　春を夢む時

その他のメモ

2021.07.19 第1.5版

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	平起式
作詩日	R4.2.25
名前	武田 一郎

名簿No. 5

詩題	起句	承句	転句	結句
瓶裏梅花	午●	諸○	欲●	揺○
	晴○	処●	佚●	花○
	風○	梅○	芳○	瓶○
	暖●	林○	辰○	裏●
	誘●	淑●	求○	賞●
蕭韻	逍○	景●	一●	春○
	遥◎	遼◎	朶●	宵◎

語註・典故・作詩メモ

淑景：春景色
芳辰：芳しい春の時節

読み下し文

瓶裏の梅花

午晴風暖かに逍遥に誘う
諸処に梅林淑景遼なり
芳辰を佚しまんと欲し一朶を求む
揺花瓶裏に春宵を賞す

その他のメモ

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	平起式
作詩日	令和四年二月二十六日
名前	平賀康雄

名簿No. 7

詩題	起句	承句	転句	結句
瓶裏梅花	春○	獨●	只●	清○
	宵○	坐●	有●	香○
	寂●	茅○	瓶○	微●
	寞●	齋○	梅○	亙●
	睡●	對●	不●	促●
庚韻	難○	短●	塵○	詩○
	成◎	檠◎	俗●	情◎

読み下し文

瓶裏の梅花

春宵寂寞、睡り成り難し

独り茅斎に坐し、短檠に対す

只だ、瓶梅の塵俗ならざる有り

清香微かに亙りて詩情を促す

語註・典故・作詩メモ

○短檠・・燭台の一種

○転句の塵は挟み平

その他のメモ

（大意）春の宵と言えど、何か物寂しく眠る気になれない部屋にこもり、明かりの下で読書したりしていると瓶に挿した梅花の、凛とした姿と微かな香りが相俟ってやおら、詩情をかき立ててくれることだ。

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	平起式
作詩日	令和四年三月六日
名前	古川彌

詩題	起句	承句	転句	結句
瓶裏梅花	朝	茅	瓶	芳
	陽	室	裏	香
	小	清	一	馥
	院	閑	枝	郁
	曙	人	梅	満
	光	影	数	幽
	虚	疎	点	居
魚韻	○	○	○	○
	○	●	●	○
	●	○	●	●
	●	○	○	●
	●	○	○	●
	○	●	●	○
	◎	◎	●	◎

詩題の読み

朝陽の小院に曙光虚し

茅室は清閑人影疎なり

瓶裏の一枝に梅数点

芳香馥郁として幽居に満つ

語註・典故・作詩メモ

その他のメモ

名簿No. 9

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	平起式
作詩日	令和4年2月
名前	松本祐輔

詩題	起句	承句	転句	結句
瓶裏梅花	几●	馥●	正●	奚○
	邊○	郁●	得●	嚢○
	瓶○	生○	詩○	覓●
	裏●	香○	媒○	句●
	數●	綴●	吟○	費●
灰韻	花○	玉●	興●	敲○
	開◎	梅◎	湧●	推◎

語註・典故・作詩メモ

奚嚢　詩景を探りつつ詩を入れる嚢

その他のメモ

読み下し文

瓶裏の梅花

几辺の瓶裏　数花開く
馥郁たる香を生ず　玉を綴る梅
正に詩媒を得て　吟興湧く
奚嚢句を覓め　敲推を費やす

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	平起式
作詩日	令和四年三月六日
名前	三浦 昭二

名簿No. 11

	起句	承句	転句	結句
	牆	侶	癘	一
	邊	伴	鬼	枝
	老	哀	猖	在
	梅	歡	狂	卓
	浴	五	花	汎
	春	十	萬	清
	陽	霜	朶	香
	○	●	●	●
	○	●	●	○
	●	○	○	●
	●	○	○	●
	●	●	○	●
	○	●	●	○
	◎	◎	●	◎

瓶裏梅花

陽韻

読み下し文

瓶裏の梅花

牆邊の梅花春陽を浴ぶ

哀歡侶伴して五十霜

癘鬼猖狂すれども花萬朶

一枝卓に在りて清香を汎わす

メモ

作詩・故典・註語

我が家の庭の隅に梅の木がある。これは、私が所帯を持った時に、福島の田舎から苗木を移植したものだ。あれから半世紀、我が人生の哀歡をじっと見守て来ている。新型コロナ騒動で行動がままならない中にあっても、時節の到来とともに、枝一杯に花をつけてくれた。一枝をテーブルに飾って花見の気分を味わってみた。

その他のメモ

2021.07.19 第1.5版

名簿No. 12

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句	承句	転句	結句
七言絶句 瓶中梅花	雨 ○	紅 ●	翌 ●	美 ●
	晴 ○	蕾 ●	日 ●	姿 ○
	梅 ○	被 ○	開 ○	見 ○
	樹 ●	延 ○	花 ○	蕩 ●
	視 ●	折 ●	香 ○	興 ●
支韻	鶯 ○	一 ●	馥 ●	無 ○
	児 ◎	枝 ◎	郁 ●	涯 ◎

平仄式	平起式
作詩日	令和 四 年 三月 十日
名前	森谷正彦

読み下し文

瓶中梅花

雨晴れ　梅樹に鶯児を視る
紅蕾に延かれ一枝を折る
翌日開花し香馥郁
美姿に見蕩れ　興涯無し

語註・典故・作詩メモ

その他のメモ

2018.03.10 第1.4版

名簿No. 13

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句	承句	転句	結句
瓶裏梅花	壬寅正月季非常	小院梅花冒雪張	紅白双枝挿瓶裏	芳香馥郁満茅房
陽韻	○○○●●○◎	●●○○●●◎	●●○○●○●	○○●●○○◎

平仄式	平起式
作詩日	令和四年三月
名前	諸星暢義

二稿

読み下し文

瓶裏の梅花

壬寅正月季常に非ずも

小院の梅花雪を冒りて張る

紅白の双枝瓶裏に挿せば

芳香馥郁茅房に満つ

語註・典故・作詩メモ

本年は庭梅がなかなか開花せず1，2月の寒気が影響か三月になってやっと花を見た。

その他のメモ

名簿No. 14

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	作詩日	名前
仄起式	2021年3月9日	山口 幸雄

詩題	句起	句承	句転	句結
へいりのばいか 瓶裏梅花 寒韻	○瓶裏梅花供佛壇◎	●吐香飄蕩憶曾歡◎	○春光遍照風猶冷●	○才貌美人何處看◎

瓶裏の梅花　仏壇に供すれば
吐香飄蕩して　曾歡を憶う
春光遍く照れども　風猶冷なり
才貌の美人　何れの処にか看ん

モメ詩作・故典・註話

○飄蕩　風に吹かれて、空中でふらふらとゆれ動く。
○才貌　才とかたちと
春光の遍けれども風寒し／高浜虚子
この句を新聞で見て、「春光遍照猶風寒」と始めた。
寒韻に合わせるため苦し紛れに仏壇を出し、亡くなった人を思い出す詩になった、どうせなら、と美人にした。

その他のメモ

梅の花瓶を仏壇に供えた。
香りが漂って、昔の楽しかったことを思い出した。
春の光が広く照らすようになったが、風はまだ冷たい、あの賢くて、美しかった人には、もう会えないのだ。